

保育所を利用する3才児の 家族の社会学的研究

——3才児のパーソナリティとの関連において——

本 村 汎

**A Sociological Study of the Family with the Child of Three Years Old
Using Nursery School: A Relation to the Child's Personality Characteristics**

HIROSHI MOTOMURA

序

パーソナリティ形成のための、あるいは子供の社会化のために物質的基礎としては、脳ずい、自律神経、およびホルモン等が理論的に考えられ⁽¹⁾ その領域での実証的研究は、医学の分野ですでにおこなわれているようである。しかし、社会学的要因 (sociological factors) との関連における社会化の過程⁽²⁾ についての系統的研究は、必ずしも十分におこなわれているとはいえない。特に3才児を対象にした研究においては、中、阿倍、鈴木等の研究⁽³⁾ があるていどで、社会学的あるいは家族要因との関連における3才児の社会化過程の研究は皆無といってさしつかえない状態にある。してみれば、なに故に社会化の過程を系統的に研究するに当って、乳児とその家族が問題にされずに、特に3才児とその家族が研究の対象にえられなければならなかったか。それは人間が3才頃から社会心理的要因の影響をより強くうけることが理論に考えられたからである。乳児にあっては、母親は唯彼の生物学的ニードを充足させるだけの意味にとどまり、それ以上の、たとえば社会的に必要な役割を乳児に要求することはない。もし社会学的要因、すなわち、家族要因と社会階層要因が、役割相互性をもつ社会体系 (social system) を媒介にして、パーソナリティに影響をあたえるとするならば、役割相互性の関係をもたない乳児を対象にすることは、社会化の過程の研究にとって、のぞましい対象設定とはいえない。

なお、いまひとつの問題となることは、多種多様な社会的要因のなかから、なに故に、特に家族要因と社会階層要因がえられなければならなかったか、ということがあげられようが、それは、パーソナリティの形成過程、すなわち社会化の過程が、家族において出発するからである。すなわち、パーソナリティの発達とも考えられる役割学習が、家族内の対人関係を媒介にして、家族の形態、育児様式、およびその家族のおかれている社会階層の相違等によって、影響をうけることが理論的に考えられるからである。したがって次節においては、3才児の家族の形態と、社会階層と、母親の志向家族 (family of orientation) の三つを独立変数 (independent variable) とし、3才児のパーソナリティの発達を依存変数 (dependent variable) とし、養育方法を媒介変数 (intervening variable) として、理論的に枠づけ、本研究報告の具体的な研究仮説の理論的根拠とした。

理論的準拠枠

家族型態と子供の社会化 家族型態が研究の主題としてとりあげられているのは、家族社会学の中でも、主として家族変動の領域においてであるが、一つの着眼点として、最初に研究の対象としてとりあげたのは、E. R. パーゼス (E. R. Burgess) であろう⁽⁴⁾。彼は、家族型態が産業化の高度化に伴って「制度的家族」から「友愛家族」に移行することを提唱し、そして、約45年間も、平等主義的な役割未分化の家族型態（友愛家族をさす）が、夫婦の幸福にとっても、また子供の社会化にとっても、最も好ましい形態であることが、一般に信じられてきた。しかし、最近になって、パースンズ (T. Parsons) や、バールス (R. F. Bales) をはじめとする構造機能主義的社会学者が、この定説に対して批判的な見解をとっている⁽⁵⁾。

すなわち、彼等の見解によれば、子供がより好ましくパーソナリティを発達させるためには、あるいはより好ましく社会化されるためには、家族の役割が未分化の状態にあるのではなく、性差別に、そして世代別に分化している必要があるというのである。この命題の前提となっているのは、パーソナリティの発達に、精神分析の理論におけるイド (id) の確立以前の本能的エネルギーと、対象関係 (object relations) における役割期待との相互作用の過程の中でおこり、そしてその過程の中で個人の生物学的生命の維持や家族の一成員としての生活に必要な役割が学習されるという、より本質的な仮説である。

この仮説に立脚するならば、家族内の役割が未分化な状態においては、生活に必要な役割を学習し内面化することが困難であることは自明の理である。たとえば、パースンズは、このような仮説からひき出された前述の命題の実証の試みとして、子供の社会化の失敗した例として「非行行為」という現象をとりあげるが、その原因の説明として産業化の高度化に伴う父親の家庭不在に於る lack of masculinity をあげる。すなわち父親の生活が社会の産業化の高度化に伴って職場生活、あるいは社会生活中心になり、一日の時間のほとんどが家族外でおこなわれているわけである。そのために家族内においては母親が女性でありながら、子供の社会化において父親の、あるいは男性としての役割を成就しなければならなくなり、ひいては子供は女性を通じて男性的役割を学習しなければならなくなるわけである。しかし、結果的には、無意識的に母親の女性的特性と同一化し、男性的特徴としての独立性と手段的価値志向 (instrumental value orientation) を欠いてくるわけである。しかし子供は男性でありながら女性のような行動をとることが恥しいことであることは十分知っている。その恥しさの気持が原因となり、すべての女性的特性から自己を解放させようと必死になり、ひいては女性的特性を示唆するすべてのものに反抗し、そして非行行為さえおかすようになるのである⁽⁶⁾とパースンズは指摘する。

それに加えるに、たとえば父親が家庭にいたにしても、平等主義の生活原理に優位性が文化的に附与されるため、パーゼスのいう役割未文化の「情愛」本位の「友愛家族」なるものが生じてくるのである。このように、構造機能主義的社会学者は、パーゼスのいう「友愛家族」が、平等主義と情愛に基づく役割未分化の家族型態であると批判し、子供のパーソナリティの発達、あるいは社会化にとって

好ましくないと主張するわけである⁽⁷⁾。

以上のような論争から、子供の社会化と家族の形態との間には、機能的、あるいは逆機能的関連性があることが若干理解することができたが、いま、すこし、パースンズのAGIL理論⁽⁸⁾と関連性をもたせながらその内容を検討してみたいと思う。

家族が個人や社会との関連で、その存続を維持していくためには、少くとも四つの機能的要件（外社会に対する適合的機能要件、目的充足の機能要件、統合の機能要件、内的に動機づけの機能要件）を達成する必要があるが、これらの機能要件を達成しようとする場合に、その構造単位（家族においては特に個人）そのものや、その構造単位に附与されている役割の分化や配分（role allocation）が、家族形態の相違によって異なってくる。たとえば、母子家族においては、この四つの機能要件を達成するのに母親一人が、それに必要な複数の役割を期待され、また、それを遂行しなければならない。しかし、祖父母の同居する大家族においては、外社会に対する適応機能要件は、父親と祖父だけによって、統合の機能要件は妻だけの役割遂行によって達成されるかもしれないのである。

このように、機能要件充足のための構造単位の配列と、期待される役割の分化と配分、そしてその実施のされ方が異なってくるわけであるが、更には家族形態の相違によって、たとえば家父長制大家族と、平等主義的核家族とでは、その権力構造が異なり、それによって子供に期待される役割や子供の動機づけの方向づけが異なってくる。事実、ストラウス⁽⁶⁾（Murray A. Straus）は、直接には家族形態をとり扱ってはいないが、それと密接に関連があると考えられる夫婦の権力構造を「夫支配型」「妻支配型」「平等主義型」…などと分類し、その違いによって子供のパーソナリティが異なってくることを実証している⁽⁹⁾。このように、家族形態と子供のパーソナリティとの間には、権力構造、役割構造などいろいろな媒介変数が理論的に枠づけられてくるが、その中でも特に重要な媒介変数は、母親の養育方法である。しかし、家族形態と養育方法との関連性についての実証的研究はほとんどみあたらず、本論における仮説設定の方法も、そのほとんどが報告者の「家族診断」「家族治療」という臨床体験に依存している。

以上、独立変数としての家族形態と子供のパーソナリティの発達（社会化）との間の関連性について吟味してきたが、次項では、いまひとつの独立変数としての3才児の家族の社会階層と媒介変数としての養育方法との関連性に焦点をあて、文献的考察をおこない、研究命題の理論的準拠としたい。

社会階層と養育方法 社会階層の相違によって養育方法の異なることは、国内、国外の社会学者によって認められているが、養育方法のどの部分がどのように異なるかについては依然として問題があ。たとえば、社会階層と養育方法の研究で、1946年にシカゴ大学グループによっておこなわれた研究の結果は下層階級の親は、暖かくて、許容的であるのに対して、中層階級の親は暖かさに乏しく厳格であると結論を下している⁽¹⁰⁾。それに対して、それから8年後におこなわれたハーバード大学グループの研究では中産階級の親は、下層階級の親と比較して、より暖かくて、子供をより自由にさせるという報告がおこなわれ⁽¹¹⁾前者のグループの結論と後者のグループの結論が相矛盾している。このような研究結果の矛盾が契機となって、研究資料の客観性、正当性、妥当性が問題にされ、ある時は、これらの矛盾した結論を調整するための説明が積極的におこなわれたが⁽¹²⁾それ以後の研究に

において明らかにされた資料は、後者のグループの研究結果を支持している。たとえば、クラッキン⁽¹³⁾ (Ethelyn Henry Klatskin) の研究はその一例であろう。

なお、ヴィンチ⁽¹⁴⁾ (Robert F. Winch) は、このような論争下において、これまでの実証的研究ををできるだけ多く集め、次のような分析結果を出している。

1. 中層階級の親は、下層階級の親に比べて子供の具現化された衝動や欲求に対してより寛容な傾向がある。
2. 中層階級の親は、行動動機[・]の観点から子供をしつけるが、下層階級の親は行動結果[・]の観点から子供をしつける傾向がある。
3. 下層階級の親は、中層階級の親に比べて体罰を利用する傾向が強い。なお、中層階級の親は、体罰よりも説得、無関心、罪障感に訴える。その他、親からの愛情喪失の脅威などの異なった方法をより多く利用している。
4. 中層階級の親は、下層階級の親と比較して、子供に対する期待水準が高い。

このように、ヴィンチは社会階層の相違によるしつけ方の相違を要約しているが、これと同様な結論をミラー⁽¹⁵⁾ (Daniel Mieler) も報告している。本報告では拡大家族がほとんどみられないアメリカ社会の中から出てきたこの一般的仮説が、拡大家族を依然として内包する日本の都市社会の、しかも3才児の家族においても同様に適用されるかを検討してみたい。

母親の志向家族と子供のパーソナリティ 人間のパーソナリティが発達する初期の、しかもより基本的な「場」が、その個人の志向家族 (family of orientation) であることは、すでにボサード⁽¹⁶⁾ (Bossard James H.S) によって明らかにされたが、それ以前から、家族がパーソナリティ発達のためのより基本的な場であることは、パーゼスをはじめとして多くの社会学者によって言われてきた。唯、彼等は、ボサードのように、家族を「志向家族」と生殖家族 (family of procreation) に区別してパーソナリティの発達を論じなかっただけである。

しかし、母親による子供の養育方法、および母親の家族意識および家族感情の特徴の源泉を理論的に追求しようとする時は、単に「家族」というかわりに、「志向家族」といった方が適切である。

⁽¹⁷⁾ なぜならば、報告者の臨床体験によればクライアント (client) としての母親は彼女の志向家族において習得し、そして内面化した役割や態度や感情を、意識的にまた無意識的に彼女の現在の家族すなわち生殖家族に転移している場合がそのほとんどである。しかし、転移のされ方は必ずしも一様ではない。

ある人は、志向家族において解決されなかった感情や役割葛藤を、彼の生殖家族における子供や夫にそのまま転移し、またある者は、それを修正した形で転移している。その結果、あるクライアントの生殖家族においては、その個人の母親としての役割や妻としての役割が十分に遂行されず、ひいては子供のパーソナリティの発達が阻害され、子供が神経症や非行行為の症状を呈している。すなわち志向家族において形成された母親自身の神経症的パターンが、彼女の生殖家族において、子供に投射され、その結果、子供も母親と同じ神経症的行動パターンをとるのになるのである。

このような報告者の臨床体験に基づく分析結果は、フィッシャー⁽¹⁸⁾ (Seymour Fisher) や、ヘンリー⁽¹⁹⁾ (Jules Henry) の心理学的、かつ文化人類学的分析結果と一致している。たとえば、フィッシャーは、3世代家族6ケースと、2世代家族14ケースを研究対象とし、ロールシャツハテストとTATと精神医学的面接を通じて資料蒐集をおこなっているが、その分析結果は、志向家族、生殖家族の分析用語を使って説明していないが、その内容は志向家族のメンバーの神経症的要素と生殖家族のメンバーの神経症的要素が一致していることをあげ、結論として志向家族の神経症的パターンが3世代にまで譲渡されることをあげている。また、ヘンリーはフィッシャーのようにパーソナリティの特性に焦点をあてず、家族メンバー間の相互作用に焦点をあてて分析をおこなっているが、その結果ある固定した病理発生的な家族内の対人相互の作用は、世代から世代へ引き継がれいと述べている。

以上のような実証された理論に準拠して、この報告の研究仮説を設定していきたい。

研 究 仮 説

1. 3才児をもつ家族の形態は彼のパーソナリティに影響を与えるが、それは家族形態の異なることからくる養育方法の相違からくるものである。
2. 社会階層は、3才児の母親のしつけ方(説得の方法)に影響を与えるが、その方向は、上層においては知性的説得の傾向が強く、中層において情緒的説得の傾向が強く、下層においては強制的説得の方法が比較的強い。
3. 3才児の母親の志向家族の安定、不安定の如何(母親のパーソナリティに内面化している志向家族を手がかりに評定されたもの)は、3才児のパーソナリティの情緒的側面と、社会的側面の両者に影響を与える。

方 法

1. 調査対象と調査手続

大阪市公立保育所を利用する昭和41年1月31日現在3才、324名の幼児とその母親を調査対象とした。調査手続としては、次節で説明される母親を対象とした質問紙と、子供を対象にした行動観察シートを、公立保育所の保母に配布し、調査をおこなった。母親用の質問紙は、母親自らが記録し、子供用の観察シートは、担当保母が記録した。

2. 調査期間と調査書回収率

調査期間は昭和40年12月～昭和41年1月までで、回収率は $189/324$ 、約58%である。

3. 測定道具、要因の指標化およびスケーリングの方法。

a) 質問紙：質問紙は三つの部門から構成され、第一の部門は居住地、両親の教育と職業、家族全体の収入およびその家族の社会的移動等の諸項目から、第二部門は育児様式の諸項目によって構成されそして第三部門は母親の志向家族(family of orientation)における要因から構成されている。この母親の志向家族の質問紙は、10の下位カテゴリーから構成され、その内容は、母親が子供の頃、彼女自

身の両親（3才児の子供の立場からみた場合は祖父母），兄弟，姉妹，あるいは全体としての家族に対して，どのような態度を持ち，どのような感情体験を持っていたかを測定できるようになっている。たとえば，「あなたは子供の頃，自分の家庭について劣等感を持つことがありましたか」という質問項目に対して，「いつも」「しばしば」「なんともいえない」「ほとんどない」「全くない」の解答項目があり，そのうちのいずれかを，該当する解答項目としてチェックするようになっている。なお，評価得点の与え方としては，ネガティブ（negative）な質問叙述に対しては1・2・3・4・5の順序で，ポジティブ（positive）の質問叙述の解答項目に対しては，5・4・3・2・1点の順序で与えた。すなわち，ポジティブな叙述に対する「いつも」という解答項目に対しては，5点の得点を与えた。その結果，累積度数分布表を作製し，それより中央値を求めて，中央値以上の得点を得たケースを「安定志向家族」とした。その内訳は第1表の通りである。

第1表 母親の志向家族

安定志向家族	62
不安定志向家族	86
計	148

註，回収ケース数は189であるが，5つ以上の項目に対して解答しなかったケースを除外した為，148となっている。

b) 行動観察紙：この行動観察シートは，3才児の「社会性」「情緒性」が観察できるようになっており，行動特性の程度は三段階に評価できるように構成されている。たとえば「母親から離れることをおそれる」の叙述に対し，(1)いつも，(2)ときどき，(3)まったくない，の答があり，そのいずれかをチェックするようになっている。得点の与え方は，「いつも」に1点，「ときどき」に2点，「まったくない」に3点を与えて，集計をおこなった。なお，ポジティブな叙述，たとえば「友人に対して親切で，協力的である」の解答項目，「いつも」「ときどき」「まったくない」に対する得点の与え方としては，ネガティブな叙述の場合とは逆の得点の与え方をした。

た。すなわち，「いつも」に3点，「ときどき」に2点，「まったくない」に1点を与えた。

c) 社会階層の決定方法：教育，収入，学歴，地域の複合指標に基づくホーリングシェッド（Hollingshed）の方式⁽²⁰⁾を参考にした。その結果は第2表の通りである。

第2表 社会階層別度数

上	層	27
中	層	110
下	層	52

189

結 果

1. 家族型態，授乳様式およびパーソナリティとの関係

第3表は，大阪市における公立保育所を利用する3才児の家族の型態の実態であるが，核家族的型態をとっているものが全体の約73%（149/189）を占めている。しかし，149ケースのうち35.5%までが母子家族および父子家族等の欠損家族となっている。それに対して拡大家族的型態をとっているものは全体の約14%（26/189）を示し，3才児の家族も同様に核家族化傾向を示している。

本報告では，すべての家族型態と3才児のパーソナリティとの関係をとり扱うのではなく，子供のパーソナリティの発達という視点からこれまで問題にされてきた祖母同居拡大家族と母子家族の両者を完全核家族との対比において検討していきたい。

第3表 族型態別百分類度数

核家族的型態		拡大家族の型態		その他	
母子家族	45	祖父母同居家族	0	減・母方兄弟姉妹同居家族	8
父子家族	8	祖母同居家族	20 (76.9)	職人同居	6
完全核家族	96 (64.5)	祖父同居家族	6 (23.1)		
小 計	149 (100)	小 計	26 (100)		14

(註) 実数 189

第4表 完全核家族および母子家族別3才児のパーソナリティ得点

(A) 社会性得点			
	人数	平均	標準偏差
完全核家族	96	93.66*	10.39
母子家族	45	83.56*	19.39
(B) 情緒性得点			
	人数	平均	標準偏差
完全核家族	96	90.26	11.48
母子家族	45	85.38	16.23

(註) Cochran Coxの検定の結果、社会性の場合、 $t_0=3.289$ で、自由度95、96の1%の危険率のt値より大、従って、両群の平均値の差は統計的に有意(※は統計的に有意であることを示す)、それに対して情緒性の場合、 $t_0=1.807$ で、両群の平均値の差は有意でない。

第5表 母子家族および祖母同居拡大家族別3才児のパーソナリティと得点

(A) 社 会 性			
	人数	平均	標準偏差
母 子 家 族	45	83.56*	18.39
祖母同居拡大家族	20	70.30*	9.62
(B) 情 緒 性			
	人数	平均	標準偏差
母 子 家 族	45	84.58*	17.49
祖母同居拡大家族	20	71.24*	9.82

(註) 社会性は、Cochran Coxの検定の結果、 $t_0=3.7458$ 、情緒性は $t_0=3.8554$

才児が、より好ましい(すぐれて)ことをあらわしている。

しからば何故に、家族型態の相違によって3才児のパーソナリティ特性が異なってくるであろう

第4表は、その対比を示したものであるが、完全核家族の3才児の社会性平均得点は93.6点を示し、それに対して母子家族の3才児のそれは

83.56を示し、完全核家族の3才児が「社会性」という点において優れていることを示している。しかし、「情緒性」という点においては、完全核家族の3才児の得点が高いことを示しているものの、コ克蘭コックスの検定は、この二つの群の「情緒性」の平均得点の差が統計的にいって意味がないことを示している

($t_0=1.807$)。すなわち完全核家族の3才児の方がより好ましいといえないのである。

してみれば、母子家族と祖母同居拡大家族との対比はどうであろうか、第5表はそれを示したものであるが、「社会性」、および「情緒性」のいずれにおいても、母子家族型態にある3

か。その原因的要因には、いろいろのものが考えられるが、より基本的な社会的要因は3才児にいたるまでの母親による授乳様式であろう。このような論考から、家族型態の相違による授乳様式の相違をみてみた。それが第6表である。この表からもわかるように、この三つの家族型態の中で、授乳

第6表 家族型態別授乳様式

	規則的	不規則的	その他	計
完全核家族	60(63.50)	15(15.63)	21(20.87)	96(100)
母子家族	35(77.78)	8(17.78)	2(4.44)	45(100)
祖母同居家族	5(25.00)	13(65.00)	2(10.00)	20(100)
計	100	36	25	161

(註) () は% $X^2=31.556$, $df 4$, $p<.01$

で母子家族、核家族の順位となっている。すなわち、この6表における資料は、完全核家族と母子家族が、授乳様式において、一般的に規則的であるのに対して、祖母同居大家族は一般的に不規則であることを示している。しかし、完全核家族と母子家族との対比においては、授乳様式上の相違は、統計的にいって全くみられない。

そこで、仮説1の実証という立場から第4表、第6表の資料の関連性を考察すると、次のようなことがいえる。すなわち、完全核家族型態にある3才児のパーソナリティが社会性、情緒性の両者において、より好ましいのは、授乳様式の規則正しいことと関連性があり、また祖母同居大家族の3才児のパーソナリティが、他の二つの家族型態にある同年令の子供のそれに比較して適応性を欠くのは、授乳様式の不規則なことと関連があるといえる。

第7表 家族型態別説得方法

	知性型	情緒型	強制型	計
完全核家族	25(26.0)	65(67.7)	6(6.3)	96
母子家族	11(24.0)	20(44.4)	14(31.2)	45
祖母同居家族	4(20.0)	6(30.0)	10(50.0)	20
計	40	91	30	161

(註) あなたは、あなたのいいつけを子供に守らせようとする時、どのような方法をとられましたか、の質問に対し、(1)親の気持だけで子供にいいつけを守らせた。(2)時には親の気持だけでいいつけを守らせたが、時には子供の気持を考えてから守らせた。(3)よく子供に説明して守らせた等があり、(1)を強制型、(2)を情緒型、(3)を知性型とした。

これは強制型によって特徴づけられる。この祖母同居大家族の特徴は、祖母によるしつけの欠陥を母親が是正するものとしてあらわれてきたものであろう。

2. 社会階層と説得方法の関係

まず、複数の要素によって構成された「社会階層」要因との関係をみる前に、階層決定要素のひと

様式がより規則的なのは母子家族(77.78%)でありそれについて、完全核家族祖母同居大家族の順位になっている。なお、授乳様式の不規則な点では、祖母同居大家族がより不規則で(65.00%)それについて

なお、現在次元の養育方法のひとつの領域として「説得の方法」があるが、それが家族型態の相違によって異なるかを検討してみた。第7表は、それを示したものであるが、この表からわかるように、完全核家族の母親の説得方法が情緒型で特徴づけられるのに対し、祖母同居大家族のそ

つである地域社会と説得方法との関係をもてみたい。すなわち、地域社会だけの相違によって説得の方法が異なるかどうかをもてみたい。第8表がその関連性を示したものであるが、地域の如何にかかわらず、約半数の人が情緒型の説得方をとっており、地域そのものの相違によって説得方法が異なってくるとは考えられない。しかし地域社会の要因に、その家族の収入、教育、職業などの素因が加わ

第8表 地域別説得方法

	知性型	情緒型	強制型	計
住 宅 街	29(26.4)	47(42.7)	34(30.9)	110(100)
商 店 街	7(36.8)	11(57.9)	1(5.3)	19(100)
工 業 街	5(20.8)	12(50.0)	7(29.2)	24(100)
そ の 他	4(13.8)	19(65.5)	6(20.6)	29(100)
無 解 答	2(28.6)	2(28.6)	3(42.8)	7(100)
計	47	91	51	189

(註) X^2 検定の結果有意差なし () は%

第9表 社会階層別説得方法

	知性型	情緒型	強制型	計
上 層	13(48.15)	10(37.04)	4(14.81)	27(100)
中 層	29(26.36)	76(69.09)	5(4.55)	110(100)
下 層	16(30.76)	5(9.62)	31(59.62)	52(100)
計	40	91	58	189

(註) $X^2=81.270$ ・df=4, $p<.01$ () は%

中層が4.55%と続いている。したがって、上層においては「知性型」の説得方法の傾向が強く、中層においては「情緒型」のそれが強く、そして下層においては「強制型」のそれが強いといえる。

以上のことから第2の社会階層と説得方法の関連性の仮説は実証されたいといい得るであろう。

3. 母親の志向家族と3才児のパーソナリティとの関係

第10表は母親の志向家族が安定していたか、不安定だったかによって3才児のパーソナリティが異なるかどうかを示したものであるが、3才児のパーソナリティの社会性および情緒性のいずれにおいても、安定志向家族をもつ母親の3才児の平均得点が高いことを示している。しかし、その両群の平均値の差が統計的に意味をもつのは社会性の場合だけであり、情緒性の側面においては、安定志向家族をもつ母親の3才児が、必ずしも安定しているとは言えない。この事実から、志向家族において体験した母親の矛盾した感情や葛藤が、そのまま子供に投射されるとは考えられない。すなわち、志向家族において体験した矛盾した家族感情や役割葛藤が子供にそのまま投射され、その結果、子供が情緒的に不安定になるのは、その家族のおかれている地域社会内の地位と、その家族の力動性パターンの

って構成された社会階層要因と母親の説得方法との間には第9表のような関係がある。すなわち、説得方法における「知性型」においては、上層は第1位をしめ(48.15%)、それについて下層(30.76%)中層(26.36%)と続いている。それに対して、「情緒型」においては、中層が69.09%をしめし第1位となり、それについて上層が37.04%、下層が9.62%と続いている。なお、「強制型」においては、下層が59.62%となって第1位となり、それについて上層が14.81%、

第10表 母親の志向家族の安定、不安定如何による3才児のパーソナリティ得点

	(A) 社 会 性		
	人数	平均	標準偏差
安定志向家族	62	76.19*	8.16
不安定志向家族	86	70.76*	9.09
	(B) 情 緒 性		
	人数	平均	標準偏差
安定志向家族	62	55.56	7.50
不安定志向家族	86	54.44	5.73

性質とのかかわり合いにおいて決定されると考えられる。

以上の実証的資料と若干の考察から、第3の仮説は部分的には実証されたと考えられるが、その妥当性は今一度、厳密に理論的に検討される必要があるであろう。

考 察

(註) Cochran-Cox の検定の結果、両群の平均値の差は1%の危険水準で有意 ($t_0=4.525$, $df_1=61$, $df_2=85$), 実数189になっていないのは、志向家族の調査において10以上の無解答項目のあったケースを除去したからである。

本研究の結果は、仮説を否定する傾向よりもむしろ肯定する傾向を示している。すなわち、われわれが理

論的準拠枠の項においてみた家族型態とパーソナリティ、社会階層と養育方法、母親の志向家族と彼女の子供のパーソナリティの関係などの比較的一般化された理論は、3才児という特定年令層の家族にも比較的ポジティブに適用されうること示している。しかし同時に結果は、上述の一般的理論の説明力の限界性や、あるいは、この一般的理論から引き出された研究仮説が、条件の何如にかかわらず、すべての家族に適用できないことも示唆している。たとえば仮説1と関連することであるが、3才児のパーソナリティの情緒的側面が、核家族、母子家族の相違によって影響をうけていない事実や、仮説3との関連することで、母親の志向家族の安定性、および不安定性と3才児のパーソナリティの情緒的側面との間に意味のある関係がみられないという事実は、まさにこの一般理論の修正の余地を示唆するものであろう。

してみれば、何故にこの研究結果が研究仮説と一致する側面と、一致しない側面を示したであろうか。それには二つのことが理論的に考えられる。その一つは、分析技法の不正確な選択からくるものである。たとえば、母親の志向家族の安定、不安定を決定する際に、唯単に測定値の中央値を手がかりにしているが、パーセントイルの技法を使って測定値を三つの層に分割し、その上層部を不安定志向家族、下層部を安定志向家族として、3才児のパーソナリティの情緒的側面と相関をとった場合、その結果はこの論文の研究仮説と一致したものになったのではなかろうかということが、推論的に考えられるわけである。もし、この分析技法に基いて分析した結果、本研究の結果と同一の結果が生じてくるならば、それは本論文の研究仮説を修正する、より確実な資料となるであろう。

研究結果のある部分が、研究仮説と一致しなかった今ひとつの理由は、測定された操作概念の理論的性質にある。たとえば、仮説I、IIIは、研究結果と「情緒性」という点において一致しなかったが、その理由は「情緒性」の理論的性質にある。すなわち、本研究における「情緒性」は、まさにバーゼス (E. R. Burgess) のいう心理発生的特性 (psycho-genic traits) に、その性質と形成過程に

において類似している。したがって、パーゼスが言うように、もし心理発生的特性が、一度確立されると、容易に変化させることのできないものであるとするならば⁽²⁰⁾ 3才児の「情緒」が社会学的要因たとえば、家族型態や母親の志向家族の安定、不安定の如何によって、統計的に意味が生じてくるほどに関連性を持たない場合があることは、理論的に考えられることである。唯、ここで、問題になるのは、サパイヤ（Edward Sapier）の理論に準拠して確立されたパーゼスの「心理発生的反応パターンの理論」（theory of psychogenic response pattern）が、どの程度に実証されているかである。もし、この実証の度合がより高いものであるならば、報告者のこの考察は一応妥当なものと言えるであろう。

なお、ここで考察の対象にしなければならないことは、研究仮説をポジティブに実証した研究結果についてである。すなわち、何故に社会階層が異なれば養育方法も異なり、ひいてはパーソナリティも異なってくるかということである。この問題に関してヴィンチとミラーは生活様式としての階層文化の相違にその解答を求めるが、彼等が階層文化という場合、それは主として、価値規範の体系や信念体系や経済的条件などを指している。⁽²¹⁾ しかし、報告者は、このような価値規範の体系や信念体系を形成させるその文化の動的側面に着目したい。すなわち、全体としての生活を動かしていくところの具体的なアイデア（ideas）、たとえば理想的な子供の育て方とか、理想的な夫婦関係などについてのアイデアを、その家族が「何」から、また「どこ」から吸収し、学習しているかという点に着目したい。おそらく、上流階層に所属する家族はそのアイデアを主として伝統的な歴史の中に求め、中流階層の家族は、専門家の言や、専門雑誌や、マスメディアの中に求め、そして下流階層の家族は、貧困文化（culture of poverty）を内面化した友人や隣人に求めるであろう。かくして社会階層の相違によって養育方法やパーソナリティが異なってくるのは、この生活アイデアを習得する準拠点の相違によるものであることが理論的に考えられるわけである。

要 約

本研究では、保育所を利用する3才児の家族をその社会階層、型態、養育方法および3才児のパーソナリティなどの立場から明らかにすることにあつた。なお、これらの変数の理論的關係としては、社会階層、家族型態、および母親の志向家族などを独立変数とし、3才児のパーソナリティを依存変数とした。このような論理に方向づけられて文献研究をおこない、それを通じて三つの研究仮説を析出し、その実証のために昭和40年1月現在で、大阪市公立保育所を利用する3才児の家族324ケースを調査対象とした。しかし実際に分析の対象となったのは189ケースであつた。その分析結果は次の通りである。

1. 完全核家族の3才児のパーソナリティは、その社会的側面において、母子家族の3才児のそれより、より適合的であるが、情緒的側面においては、完全核家族の3才児がより安定しているとは言えない。
2. 上流階層の家族が養育方法において、「知性型」の方法を採用するのに対し、中流階層の家族は「情緒型」を採用し、そして下流階層は「強制型」を採用している。
3. 母親の志向家族の安定している家族の3才児のパーソナリティは、その社会的側面において、

母親の志向家族の不安定な家族の3才児のそれに比較して、より適合的であるが、情緒的側面においては、前者の家族の3才児がより安定しているとはいえない。

このように、研究結果は研究仮説を支持する傾向を強く示しているが、同時に一致しない傾向も示し、調査方法における分析技法の精密化と、今いちど、研究仮説の妥当性の吟命を要求している。

註

- (1) 中脩三, できる子供, できない子供, 慶応通信出版, 昭和38年 P. 13
- (2) ここでいう「社会化の過程」とは, 子供の社会化を可能ならしめる対人関係の手段的側面を意味すると同時に, すでにある程度構造化したパーソナリティの社会的側面の動的過程を意味している。後者は, パーゼス (E. W. Burges) のパーソナリティ形成に関して biogenic, psychogenic, sociogenic, という時の後者の二つに帰因するパーソナリティの側面に該当する。
- (3) Naka, Abe and Suzuki, "Childhood Behavior Problems," *Acta Paedopsyc*, 32, P P. 11—16
- (4) E. W. Burgess and Harry J. Locke, *The family: from institution to companionship*, American Book Company, 1950の第1部「社会変動における家族」の中で家族型態の変化を扱っている。特に都市社会における家族の型態的類型としては, 都市を構成する地域性の特徴との関連で, Matricentric family, Semi-patriarchal family, Emancipated family, Non-family の六つの家族類型を理念型的に設定している。特に113—145頁を参照。
- (5) T. Parsons and R. F. Bales, *Family, Socialization and Interaction Process*, Glencoe, Ill., The Free press, 1955, 特に23—24と35—54頁を参照。
- (6) T. Parsons, Certain Primary Sources and Patterns of Agression in the Social Structure of Western World. *psychiatry*, 10, 167—181., 1947.
- (7) Murray A. Straus, "Conjugal Power Structure and Adolescent Personality", *MFL.*, 24, P. 18, 1962.
- (8) T. Parsons and R. F. Bales, op. cit., 35—131. Parsons. T. and Smelser, *Economy and Society*, Routledge and Kegan Paul Ltd., London, 16—28., 1957.
AGIL理論との関連で家族型態と社会化の両者のかかわり合いを吟味する理由は, このAGIL理論が個人と家族の機能的関連性を分析するのに, より有効な分析用具として考えられるからである。
- (9) Murry A. Straus, op. cit., 17—25
- (10) Martha Sturm White, "Social Class, Child Rearing Practices, and Child Behavior," *Amer. Socio. R.* 22, P. 705., 1957.
- (11) Eleanor E. Maccoby and Patricia K. Gibbs and the Staff of the Laboratory and Human development, Harvard Univ., "Methods of Child Rearing in Two Social Classes," in *Reading in Child Development* edit. by W. E. Martin and Celia Burns Stendler, New York: Harcourt Brace and Company, 1954.
- (12) Urie Brannenbrenner, "Socialization and Social Class through Time and Space," in Eleanor E. Maccoby, Theodore M. Newcomb, and Eugene L. Hartley (eds.), *Readings in Social Psychology* New York: Holt, Rinehart and Winston, P P. 400—425, 1958.
- (13) cf. Ethelyn Henry Klatskin, "Shifts in Child Care Practices in Three Social Classes under an Infant Care program of Flexible Methodology," *The Amer. J. of Orthopsychiatry* 22, 52—61, 1952
- (14) Robert F. Winch, *The Modern Family.*, New York, Holt, Rinehart and Winston Inc. P P. 491—492, 1964.
- (15) Miller Daniel R and Swanson Guy. R., *Inner Conflict and Defense*, New York. Henry Hold, P P.

426—427, 1960. 本論において明らかにされた社会階層の異なることによるしつけの相異の理由についてミラーは、上中層文化の「現実主義」と、下層文化の「刹那的快楽主義」を指摘する。彼の説明によれば上中層社会においては、業績本位の価値、たとえば成功、権威、権力などを実現するために、衝動や欲求の直接的充足を延期し、儉約、教育、独立心、責任の重視を強調するということである。それに対して、下層社会においては、社会的にも経済的にも心理的にも恵まれず、その日暮しの生活をする人々が多く、その殆んどが将来における希望実現の可能性について不信感を抱いている。そのために生活は刹那的快楽主義によって支配され、養育の領域においても無関心、不規則的授乳、不十分な排泄訓練、遅い離乳、および拒否的、放任的態度があらわれてくとミラーは説明する。

- (16) Bossard, James. H., *The Sociology of Child Development*, Harper and Bros, New York, 40-55, 1948.
- (17) cf. T. Parsons, *Family Socialization and Interaction Process*, The Free Press, Glencoe, Ill. P., 124, 1955; Otto Pollack, *Social Science and Psychotherapy for Children*, Russel Sage Foundation, New York, 39—59, 1952.
- (18) Seymour Fisher and David Mendell, "The Communication of Neurotic Patterns over Two and Three Generations," *A Modern Introduction to The family*, edit. by Norman W, Bell and Ezra F. Vogel, The Free Press, Glencoe Illinois, 616—622, 1960.
- (19) Jules Henry and Samuel Warson, "Family Structure and Psychic Development," *Amer. J. Orthopsychiatry*, 21, 59—73, 1951.
- (20) E. R. Burgeee, and Lock, *The family*, American Book Company, P.244, 1950.
- (21) cf. Winch. op. cit.

Summary

This Paper attempted to make a study of the family with the child of three years old in terms of its social class, family form, the way of the dicipline, and his personality characteristics. The size of the sample was 384 families, but the actual analysis was given to 189 families because some of the families was eliminated from the analysis for their inadequate answers in the questionnaire. The results were as follows.

1. The child of three years old in the complete nuclear family was more adaptive in the social aspects of the personality in compared with those of the same aged child in the family which is composed of mother and her child, but in the emotional aspects of the personality no statistical significance of the difference between these two family groups could be found. When compared the child of the complete nuclear family with those of the extended family in terms of the social and emotional aspects of the personality, the big difference was shown between these groups. In other words, the child of the former was much more adaptive and stable.

2. The mother of the upper social class family tended to rationally and intellectually dicipline the child; the mother of the middle class showed the tendency to dicipline emotionally, and lower social class mother tended to force the chlid to do what she expected of him.

3. The child of the family in which the mother's family of orientation is stable showed adaptive traits in the social aspects of the personality much more than the child of the family with the unstable mother's family of orientation, but in the emotional aspects of the personality no statistical difference between these family groups could be found.